

教職の魅力とは ～現場教職員の生の声を集めて～

学校法人千葉敬愛学園敬愛大学経済学部教授 なかむら としゆき 中村 敏行



1 はじめに

3年前に千葉県教育委員会を退職し、現在は敬愛大学で中・高社会科の教員養成に携わっている。以前から退職した後は、これまでの経験を生かして「人を育てる仕事」をしたいと考えていた。

今は、どうしても千葉県の教員になりたいという「意欲」と「やる気」に満ち溢れた学生たちと充実した日々を過ごしている。

ご承知のように、昨今、教員採用選考の志願倍率が大きく低下しており、多くの関係者が強い危機感を抱いている。志願者の確保は急務であり、そのためにも教員という職業の魅力をアピールしていくことは重要であると考えている。

今回は、「自己の経験」「現場教職員の生の声」「教職課程で学ぶ学生の視点」などから教員という仕事の魅力を紹介したい。

2 教員としての原点

今から40年ほど前になるが、初任教員として千葉県北西部にある市に赴任した。当時の記憶はかなり薄らいできたが、一つ鮮明に覚えていることがある。その市の教育長さんが朗読してくれた安積得也という詩人の「明日」という詩のことである

若い私にとって「教員の仕事とはこういうものだ。」と強く印象づけられた瞬間だった。

以来、漠然とではあるがクラスの子供たちのために全力で努力することこそが、目の前の子供たちの才能を開花させることにつながると考え無我夢中で頑張った。

教員人生は楽しいことや嬉しいことも数多くあったが、クラスの子供たちのことで苦悩することもしばしばだった。

そんな時、この詩が私の心の支えであり、教員という仕事の有り様の原点だった。

「明日」

はきだめに えんど豆咲き
泥池から 蓮の花が育つ
人皆に 美しき種子あり
明日（あす）何が咲くか

（『詩集 一人のために』より）

教室には、将来の日本を背負って立つリーダーもいれば、優秀な科学者もいる。そうした個々の子供たちが持っている素晴らしい才能を開花させることが、教員の仕事である。

子供たちに寄り添い才能を開花させるために努力し、そして自分自身も教員として、人間として成長していく。このような仕事は他にはなく、これこそが「教職の魅力」である。

3 現場教職員の生の声

県内のある職員団体の支部が行った「教職員のすてきな瞬間エピソード」というアンケート調査がある。現職の教職員が日常の仕事の中で、どんな時に教職に就いて良かったと感じているのか、生の声を集め、情報発信している。

私の研究室にも「ぜひ教員を目指す学生に紹介して欲しい。」ということで資料として提供されたものである。



資料を読んでもみると、「教職の魅力」が満載されている。紙面の都合上すべてを紹介できないのが残念であるが、3点に集約し、内容を紹介したい。

(1)子供たちの日々の成長が感じられる

- 何と言っても、子供たちの成長を目の前で見られること。逆上がりができた瞬間、問題が解けた瞬間の子供たちの笑顔は最高です。
- 「できなかったことができるようになる」無限の可能性を持った子供たち。そんな子供たちの成長を近くで見守ることができる。こんな素晴らしい職はありません。

子供たちは日々経験をとおして成長する。その手助けをしながら、子供たちの成長や頑張っている姿を間近で見ることができるのは、この仕事の大きな魅力である。

(2)人間形成や将来の生き方に深く関わることができる

- 不登校になっていた子供と話をたくさんし、一緒に悩み、励まし、ついに皆勤賞をもらえるまでに成長してくれた時、とてもやりがいを感じました。
- 以前担任した子供から「先生からもらった言葉のおかげで今も頑張れています。」との手紙が届き、教員は時がたっても誰かの支えになれる素敵な仕事だと感じました。
- 教え方、関わり方で子供たちから反応がストレートに返ってきます。こんなにおもしろく、刺激的な仕事は他にありません。

教職員の関わりは、子供たちの心の成長やその後の生き方にまで大きく影響を及ぼすこともある。

責任もあるが、やりがいも大きい。

(3)子供たちと一緒に自分も成長できる

- 子供たちの悩みに寄り添って日々を生活し、成長をそばで感じることができます。多くの体験から教員も人として成長することができます。
- 卒業時「先生があのかとき話を聞いてくれたから頑張れた。ありがとう。」と言われたときに、こんな私でも子供の役に立てたと思ひ涙がこぼれました。子供と一緒に成長できる教員という仕事は最高です。

教職は「人を相手にする仕事」である。

子供たちのトラブルや問題に向き合いながら、共に解決し、時に子供に学び、教員自身も人間的に成長していくことができる。

今回紹介した資料は、学生たちが「教職の魅力」を肌で感じられる大変貴重なものであり、今後、教員養成の場で活用していきたい。

4 まとめとして

現在、「教職概論」という科目を担当しているが、その第1回目の授業で、学生に「なぜ教員を目指すのか」という質問をしている。

学生の回答で多いのは「過去に素晴らしい先生との出会いがあった」「日々の成長や人間形成への援助・手助けをしたい」「教科の内容、楽しさを伝えたい」などである。

教員を志望する上で、子供たちへの援助や手助け、教科指導などに対する「使命感」や「意欲」も大切な要素である。

しかし、それらを後押しするのは、素晴らしい恩師との出会いである。

これからも教職員一人一人が教職に魅力を感じ、生き生きと仕事をしている姿を子供たちに示すことが教員志願者を増やすことにつながるのではないだろうか。

教職の魅力

元明海大学副学長 外国語学部長 教職課程センター長 たかの けいぞう 高野 敬三



1 なりたい職業に関するアンケート調査

いつの時代でも、子供にとって憧れの職業やなりたい職業のベスト10にランクインするのは教師である。手元にある(株)ベネッセコーポレーションが昨年11月に約1万8千人の小学生に対して実施した「小学生なりたい職業ランキング」によれば第5位に保育士・幼稚園の先生、第6位に学校の先生がランクインしている。ちなみに、第1位はユーチューバー（過去4年連続）であった。同じく同社が一昨年、中高生約1千7百人に対して実施した調査結果によれば、教師・教員・大学教授が第1位となっている。同種の調査は長年、様々な機関が実施しているが、あこがれの職業には教師がランクインしているのが見て取れる。教師という職業が「ブラック」だとして喧伝けんでんされたここ十年間くらいにおいても、このことに大きな変化はない。

2 学校における働き方改革の進行

平成25年に日本が初めて参加したTALIS（国際教員指導環境調査）の結果に端を発した、学校における働き方改革は着実に進行しているのか？そもそもTALISの結果はどんなものであったか？

日本の教員（中学校）の1週間当たりの勤務時間は参加OECD加盟34か国中最長（日本53.9時間、参加国平均38.3時間）であった。このうち、授業時間は参加国平均と同程度である一方、課外活動（スポーツ・文化活動）の指導時間が特に長い（日本7.7時間、参加国

平均2.1時間）ほか、事務業務（日本5.5時間、参加国平均2.9時間）、授業の計画・準備に使った時間（日本8.7時間、参加国平均7.1時間）等も長いという結果であった。この間、平成31年1月には、中教審がいわゆる「学校における働き方改革」の答申を出した。この答申を受けて、国は教員の勤務時間の上限を月45時間、年間360時間としたガイドライン（後に、指針に格上げ）を定めたり、1年単位の変形労働時間制（休日のまとめ取り）を採用できるようにしたりして勤務時間の管理を徹底するように通知した。また、「基本的には学校以外が担うべき業務」「学校の業務であるが必ずしも教師が担う必要のない業務」と「教師の業務だが負担軽減が可能な業務」との3つに分類して、学校及び教師が担う業務の明確化・適正化を図った。加えて、運動部活動や文化部活動の在り方に関する総合的なガイドラインを定め、学期中は週当たり2日以上（平日1日、土日1日以上）を設けることや、1日の活動時間は、長くとも平日は2時間程度、学校の休業日は3時間程度とするよう求めた。更には、小学校における35人学級の整備、小学校高学年における教科担任制の導入、教師以外の外部人材（スクール・サポートスタッフ、学習指導員等）の導入などを制度化するとともに学校のIT化を推進してきた。今年4月4日に公表された令和4年度教員勤務実態調査（確定値）によれば、平日1日当たりの学校での勤務時間の平均は、小学校で10時間45分、中学校で11時間1分と

前回調査からは30分ほど減少したものの、国が上限としている月45時間を超えるとみられる教師は中学校で77.1%、小学校で64.5%であった。業務別にみると、平日については、主に、「授業（主担当）」「朝の業務」「学習指導の時間」（小学校）が増加し、「学校行事」「成績処理」（小学校）「学校経営」（小学校）「学年・学級経営」（中学校）「生徒指導（集団）」（中学校）の時間が減少している。土日については、主に、「学校行事」「部活動・クラブ活動」（中学校）の時間が減少している。

遅々としてではあるが、学校における働き方改革は進行していると考ええる。

3 教員採用試験の倍率低下の実相

昨年度実施された令和6年度教員採用選考において、東京都教育委員会は、小学校の採用倍率（受験者数÷採用者数）が過去最低の1.1倍となったと発表した。全校種合わせた全体の採用倍率も1.6倍で、初めて2倍を切ったという。東京都を含め全都道府県等が実施した令和6年度教員採用選考に関する採用倍率については、現段階では文部科学省の正式発表は待たねばならない。

しかしながら、その前年度である令和5年度教員採用選考に関する文部科学省の実施状況調査によれば、全国の倍率は小学校が過去最低の2.3倍、中学校も過去最低とほぼ同水準の4.3倍となっている。文部科学省の調査によれば、小学校の採用倍率が過去最高の12.5倍となった平成12年度の受験者数は全国で4万6156人、採用者数は3683人であった。他方、令和6年度教員採用選考における受験者数は3万8952人、採用者数は1万7034人。採用者数が4倍以上に増加する一方で、受験者数の減少は約16%に留まっている。つまり、採用倍率の低下は、退職者数の増加や臨時的任用教

員、非常勤講師からの正規採用となる者の増加などを理由とした採用者数の増加が大きく影響していることが分かる。次に、受験者数の減少についてであるが、文部科学省の資料によると、大学等で教職課程を履修し教育職員免許状を取得した者の数は、平成25年度では約22万人に対して令和3年度では19万7千人となった。約1割の減少幅である。これは昨今の18歳人口の減少に伴う大学入学者の総数が減少していることが少なからず影響しているものと考えられる。

こうしたことから、近年の教員採用試験の倍率低下一つをもって、教職に関してマイナスイメージが定着して、子供たちや学生が教職を将来のなりたい職業の一つとして選択していないとは必ずしも言えないと考える。

折しも、国は教員の残業手当の「代替」とされている教職調整手当4%を10%以上に引き上げるという報道もあったが、このことが倍率低下を抑制する解決策となるか疑わしい。

4 教職の魅力再考

「あのとき、あの先生のおかげで、現在の自分がある。」「私の人生で、一番影響を受けたのは、小学校のときの担任の先生である。」などといった発言は、様々な分野で活躍している著名な方々から、よく聞かれる。

教職の魅力は、何ととっても、子供の人間形成に深くかかわることができる面白さである。子供の全人的な発達をサポートする職業に就き、教師も日々成長できることにある。子供の成長に尽くすことの喜びである。一人の教師が子供の成長に関わり、子供の喜怒哀楽を共有する喜びである。子供の幸せを自分の幸せと捉えるのである。給料等の多寡では語れない、こうした教職の魅力は、他の職業に見出すことは難しい。

せんは 千の葉の先生になる

県教育庁教育振興部教職員課

【選ぶなら千葉県です！】

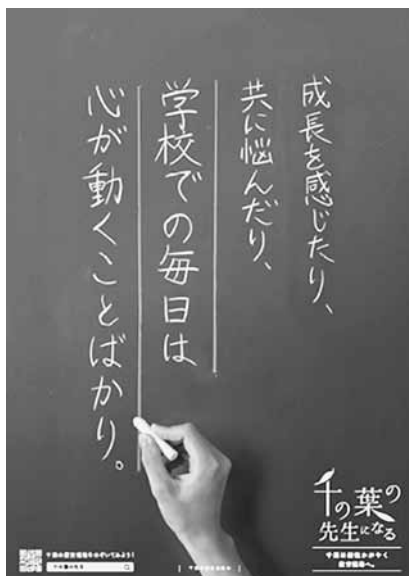
大学生向けの出前講座や、教員採用候補者選考の説明会では、開口一番、このように伝えている。まずはじめに、異動要件の良さが千葉県の魅力の一つである。千葉県は離島等の僻地要件がない。小中学校では、5つの教育事務所と千葉市が管轄していて、基本的には管轄内での異動となる。他の自治体では、管轄外への異動が必須のところもあるが、千葉県は管轄をまたいだ異動をしなければならないという要件はない。もちろん、管轄外への異動希望を出すこともできる。さらには、所持免許状により、異校種間交流ができる。教員になってからの選択肢が豊富である。他県出身者が多いのも特徴の一つである。他にも、妊娠に起因する疾病や精神疾病に関しては療養休暇180日が付与される。精神疾病について、90日を超えると分限処分として休職処分となる自治体が多いが、180日付与され

るのは、本県独自の特徴である。

また、千葉県は工業・農業・水産業等、いずれの産業も国内上位である。空港やアクアライン等、交通機関も整っており、都市部へのアクセスが良い。スポーツやイベント施設やアミューズメント施設、大きなショッピングモールも充実している。山、田畑、海、河川、湖沼等は四季折々の表情が豊かで、多様な自然にも恵まれている。これだけ多くの側面をもっている千葉県は、働きやすく、住みやすい。そして、まさに、教材の宝庫なのである。

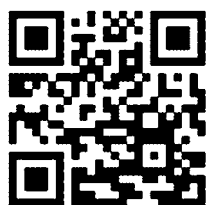
せんは 【千の葉の先生になる】

令和5年度から、千葉県教育委員会では、新しく、公立学校教員採用特設サイト「千の葉の先生になる」を開設した。千葉県の子供たち、教員、学校、地域等、たくさんの輝く個性を、光をたくさん浴びてきらきらと輝く





「千の葉」に例えて表現した。特設サイトでは、現場で働く教員のインタビュー動画が見られる。特設サイト「千の葉の先生になる」で「ホームルーム」に登録すると、説明会や相談会等のイベント予約ができたり、公立学校教員採用候補者選考に関する情報を得たりすることができる。



←特設サイトはこちらから



令和6年度には、新しく2つの事業を立ち上げた。1つ目は、「教員不足解消に向けた奨学金返還緊急支援事業」。令和6年度から11年度までの間に本県の小・中・特別支援学校の教員として採用された者のうち、要件を満たす方全員の日本学生支援機構第一種奨学金返還を支援するというものである。今の高校生や大学生は、進路選択の際の参考にもしてほしい。2つ目は「千の葉の先生養成塾」。大学3年生等を対象として、教員養成講座を開講する。本講座の修了者には、令和8年度（7年度実施）の公立学校教員採用候補者選考における優遇措置を予定している。

【先生って最高です！】

学校では、色々な場面を想定して物事が進められている。授業準備段階では、「こんな問いかけをしたら、こんなふうに答えるだろう。」「こういう発言があったらこうしよう。」等、担当する子供たちの姿を想像しながら準備をする。学校行事、保護者面談、様々な場面においても同様である。それでも、教師が予想していなかったようなことが次々と起こるから、学校は面白い。日々、発見の連続である。例えば、用意していた手立てが予想外にうまくいかなかったときには、「ああ、なるほど！そういう反応もあるのか。だったらこれではどうかな。」と、アイデアを膨らませる過程が、わくわくして楽しい。「できた！」「わかった！」「先生、見て見て！」といった子供たちの表情や成長する姿を目の当たりにしたときの喜びと達成感は、何にもかえがたい、最高のご褒美である。

当課では、高校生向け、大学生向けに出前講座を行い、教職の魅力や仕事内容等を伝えている。出前講座に参加している学生に、教師という仕事に興味をもったきっかけについて聞くと、「恩師に憧れて、教師を目指すようになった。」と話すケースが非常に多い。「〇〇（教科）の先生の授業が面白かった。」「当時の担任がとても親身になって相談にのってくれた。」など、当時の具体的なエピソードも出てくる。教員という仕事は、年月が経っても鮮明に子供たちの記憶に残る仕事、進路選択に大きく影響を与える仕事でもある。

これから教師を目指すみなさんには、ぜひ千葉県で、きらきらとした毎日や心が動く毎日を実感しながら働いてほしい。「大切なのは、あなたらしさ。」千の葉の先生になって、あなたらしい葉をひらこう。